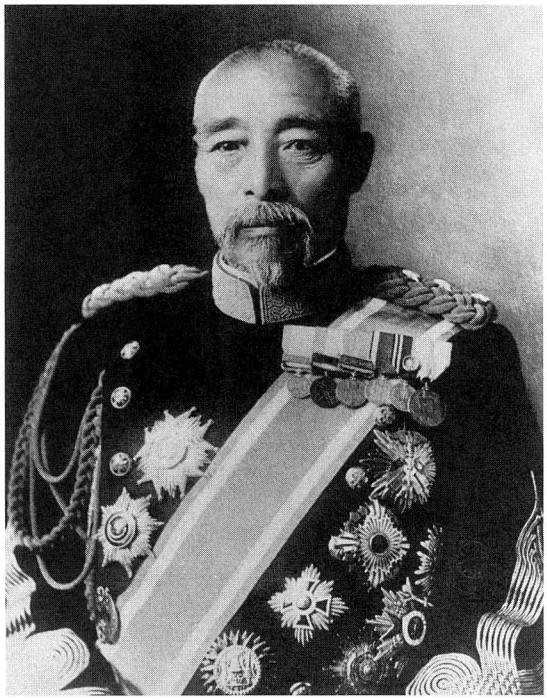
聴覚障害元帥 奥保鞏

伊藤 文久



奥保鞏(おく やすかた 1846～1930)
国立国会図書館ウェブサイトより

はじめに

司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」(文春文庫 第4巻118ページ)に、日露戦争の第二軍司令官奥保鞏の耳がきこえないことが書かれている。

> 奥保鞏は、包容力に富んでいる。かれはこまかい作戦計画や作戦判断にいちいち口出しせず、「すべて参謀長にまかせる。二者択一をせまられたときか、戦況が紛糾しきったときにのみ自分が決をくだす」と、最初からそのような方針でいた。かれは、幕僚会議の中央にすわっていても、ほとんど無言でいた。もっとも口出ししようにもできない事情があった。かれは耳がきこえなかった。完全な聾者ではなかったが、かれに話しかけようとすれば、筆談でなければならない。参謀長以下の幕僚たちは、みなそうした。

障害者を排除するイメージが強烈にある陸軍において、軍のトップ司令官が聴覚障害であり、戦争の最中に筆談で幕僚会議をしていたとは信じ難く、実際はどうなのかを調べた。

略歴

1846(弘化3年)11月	小倉で生れる
1861(文久元)年9月	小倉藩に仕える
[1871年	廃藩置県]
1872(明治5)年4月	陸軍大尉
1874(明治7)年6月	陸軍少佐
[1877年	西南戦争]
1878(明治11)年11月	陸軍中佐
1882(明治15)年2月	陸軍大佐
1885(明治18)年5月	陸軍少将
1886(明治19)年7月	歩兵第一旅団長
1891(明治24)年6月	東宮武官長
1892(明治25)年1月	兼東宮大夫
1893(明治26)年11月	近衛歩兵第二旅団長
[1894～1895年	日清戦争]
1894(明治27)年11月	陸軍中将・第五師団長
1895(明治28)年8月	男爵
1896(明治29)年10月	第一師団長
1897(明治30)年10月	近衛師団長
1898(明治31)年1月	東京防御総督
1900(明治33)年4月	東部都督
1903(明治36)年11月	陸軍大将
[1904～1905年	日露戦争]
1904(明治37)年3月	第二軍司令官
1906(明治39)年7月	参謀総長
1907年(明治40年)9月	伯爵
1911(明治44)年10月	元帥
1930(昭和5年)年7月	没

元帥について

奥保鞏は、薩摩・長州出身・皇族以外で初めて元帥になった。奥保鞏が元帥になるまでは、以下の7名(皇族1、薩摩5、長州1)である。

西郷隆盛(薩摩)、小松宮彰仁親王(皇族)、山縣有朋(長州)、大山巌(薩摩)、西郷従道(薩摩)、野津道貫(薩摩)、伊東祐亨(薩摩)

聴覚障害に関する記述

奥元帥の伝記「奥元帥伝」に、聴覚障害に関する記述が遺されている。

・第1章 軍人としての奥元帥

元帥総長となるの後耳患に罹り樞機に任じ難しとて数次辞職を申出でられるも許されず、明治45年1月に至り始めて重責を解かれ議定官に親補せられた。(中略)元帥は晩年に及びて内助の功多き夫人に先立たれ、又耳患を病み脳溢血症に罹られてからは大好物の酒と煙草を絶対に禁止せられ、爾後娯楽としては詩作囲碁の他に何等自ら慰むるものも無かった。(p13-p14)

・第22章 参謀総長時代

奥大将は耳患漸く重く爲めに軍職を曠廢せんことを恐れて屢々骸骨を乞はれた。しかし至尊常に慰藉して其の職に留め給ふたが、明治45年1月20日遂に辞職を聴許し給ひ、御紋章付銀製花瓶一対を賜ふて既往7年間の労苦を労ひ、引き続き元帥として軍務に参興すべきを命ぜられ、猶2月12日皇太子殿下よりも御紋章付銀製花瓶一対を下賜せられ、同月24日議定官に親任せられた。(p293-p294)

・第23章 元帥時代

第三節 耳患を憂て元帥辞退を願ふ

大正4年11月10日京都紫辰殿を挙行せられた時には、耳患を病みつつも深夜大嘗祭に参列して崇厳なる儀式に陪し之に依りて御紋章付金杯一組酒肴一対を下賜せられた。奥元帥の耳患に就いては既に略述せし所なるが大正5年頃には余程聴力も衰へて来て高声で談話せれざば聴取れない程度となった。(中略)元帥の重職に留まることは尸位素餐の誹りを免れないと、忠誠一徹の奥大将は深く決心する所ありて、一日元帥副官服部真彦氏に其の意中を語り元帥を辞退し且つ偕行社々長をも辞任すべれば宜しく其の手続きをして呉れよと依頼せられた。副官は元帥の決心頗る固きを見て敢て争はず、之を陸軍省軍務局長奈良少将に計ったが、陸軍としては前例の無い事とて辞退の執奏をなすことが出来ぬとの返事であった。(p303-p304)

「奥元帥伝」は奥元帥薨去3年後に発行で、巻末付録に回顧談が載っていて31名中10名が元帥の聴力や筆談に触れていた。(肩書は当時)

元帥の御病中最後に私は知人から托せられたる薬湯用材料を携へて伺候しましたが、御痛中のことでもあり、無論御目に懸る考へは無く御容体の如何を御聞きして急ざ御暇せんとしたが、元帥には御不自由の御身を態々免母車に乗つて女中書生に扶けられ自ら応接間に出て、一時間餘も筆談せられ其の問病氣を打忘れたるが如き態度で、国家の前途や軍事上の事柄に力を込めて談されたる御誠意には覚えす落涙しました。(陸軍中将 堀内文次郎)

山縣老公他界の後は古参元帥として永年陸海軍元帥会議の議長の任にあたり、耳患甚しきに及び曠職の虞ありとしてしばしば辞任を申出でられたが、宮内省でも取扱方法なく自然そのままに過ぎたが、時々思ひ出した様に元帥を辞退したいがと話されて居た。元帥の耳患は明治四十四年以後で日を経るに従ひ聴力は段々と衰へたが、視力は依然として確かで仔細に新聞を讀まれて質問されるので吾々は其のの答辯に苦しんだことも度々であつた。（陸軍中将　山田陸槌）

晩年耳患は次第に重くなりて来客には筆談を用ゐ（陸軍主計総監　廣瀬正徳）

私が副官となつて間も無く、元帥は耳患の治療に手を尽くされましたが経過宜しからす多少聴力減退の傾向がありました。まだ聴音器を使用せらるる程度ではなかつたが、当時恰も世界大戦中にて軍務多端の折柄なれば、この如き宋聾の身にて現職に留なるは曠職の責めありと恐懼し、元帥御辞退の儀を願ひ出でられ同時に左記の如き偕行社長辞任の直書を専属副官石井大尉を以て私に渡し其手続を致して呉れとの事でありました。（陸軍中将　服部真彦）

明治四十一年二月に（中略）閣下の御供をして彦根、八幡方面に出張した際であります。閣下には急に中耳炎が再発して御苦痛の様子でありましたので、早速医師を八幡の宿に呼び診断せじめた所が、医師は此儘では宜しく無い充分御静養となされ第一御手當が必要でありますと勧告した。そこで吾々は大に心配して閣下に名古屋に到りて完全なる医療を受けらるゝ様お勧めしたが、頑としてお聞入れが無いので途方に暮れました。（陸軍少将　黒澤主一郎）

大正初年頃から元帥は全く聴力を害はれ対話は一切筆談であつた。（中略）私は当時元帥邸附近に居住せし関係上電車に乗合す事が多く又お誘ひにも参りますと元帥自身も聾の電車乗りは危険だからとて大に喜ばれ、自ら電車切符を出し。（陸軍少将　鶴見虎太郎）

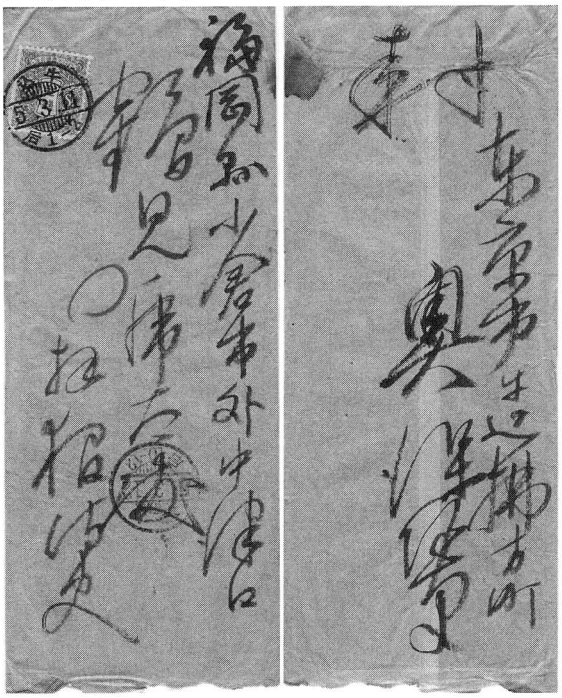
部下の西澤軍曹が千葉の電信隊に入營兵を送つて行く序でに新発田名産の梨子を少々元帥邸に托送しました。（中略）一寸で宜しいから御目に懸ることは出來ません乎と願ひ、應接間に待つて居ると、間もなく元帥が出て來られて筆談されました。（陸軍少将　江藤源九郎）

大正七年鷗友會が出来て屢屢元帥と會見するの機會を得たけれども、會て功名手柄話を聞いた事もなく又聞きたい事があつても耳患に罹られたる元帥を煩はすに忍びす、逐に思ふ事も聞かす仕舞になつたのはまことに残念であります。元帥の耳患は職務柄猛烈なる砲撃に災せられたる所尠なからぬやうにも云はれましたが、之が爲めに職務を盡すことが出来ないと慨慨せられたことは毎度の様であつた。（勅任判事　伊藤景直）

薨去の 2 週前呼ばれて（中略）耳患はその以前からで来客との要談は総て筆談でありました。（歩兵少佐　正木宣儀）

大正天皇御病前の半月前閣下から「耳遠き故筆談でも良ければ会ってやる」との御章を拝受致した時は、永年の思ひが叶つたので嬉し涙に咽びました。（知恩社　石田岳堂）

元帥自筆の手紙



牛込 大正5年3月11日 → 小倉 3月12日

“耳患“にも読める部分（中央）

奥元帥から小倉市中津口・鶴見虎太宛の手紙の中に”耳患”にも読める箇所がある。消印の日付も「奥元帥伝」の記述“大正5年頃には余程聴力も衰へて来て高声で談話せれざば聴取れない程度となった”の時期にも一致する。

坂の上の雲に対する考察

「奥元帥伝」から、参謀総長を務めていた時に耳の病気にかかり任務を果たすことが出来ないと辞任を申出てようやく辞任を認められ、辞任と前後して元帥となったことが分かる。つまり元帥になった時点で既にかなり聴力を失っていたことになる。元帥になったのは64才である。参謀総長を任じられたのは、1906(明治39)年7月で坂の上の雲の舞台日露戦争(1904～1905)の後である。また、参謀総長を任じられた時は耳の病気で任務遂行が出来ない状態ではなかったと思われる。これらより小説の“日露戦争の最中に筆談で幕僚会議“は、架空と判断できる。なお、伝記「奥元帥伝」本文も付録の回顧談に基づき、回顧談や筆者の経験を元にまとめており、記憶違いはあっても「奥元帥伝」付録の回顧談がもっとも事実を表していると思われる。ここで、何故、司馬遼太郎が小説で聴覚障害を描いたのかという謎が生ずる。これは推測するしかないが、奥元帥に関する伝記の類は「奥元帥伝」しか残されてなく、司馬遼太郎も読んだと思われる。そして司馬遼太郎は付録の回顧談で31名中10名が聴覚や筆談に触れていることに強い印象を受け、小説での人物設定に盛り込んだのではないかと思われる。

最後に

軍最高位の元帥が筆談していたのは間違いなく、雲の上のような地位の人々が筆談でやり取りしていたのは意外である。この調査のきっかけを与えて下さった桜井会長に感謝する。

参考文献

「奥元帥伝」黒田甲子郎 国民社 1933

「坂の上の雲」司馬遼太郎 文春文庫 1978

「日露戦争」児島襄 文春文庫 1994

「征露第二軍写真帖」齋木寛道 博文館 1905

「第二軍従征日記」田山花袋 博文館 1905